



森林環境教育って、
なんで重要ななの？



森林に連れて行く前に
知っておきたい

まずは環境教育について考える

環境教育は、今後社会や個人が直面するあらゆる問題を平和的に解決できる人間を育てるための教育、すなわち、世界が恒久的に平和で持続可能であるために、その社会を支える人づくりの教育なのです。

この提案は、1975年に国連で採択された「ベオグラード憲章」から現在に至るまで引き継がれていますが、世界の社会問題（紛争、開発、

環境、ジェンダーなど、様々な問題）の多様化を鑑みて、「環境教育」からESD（持続可能な発展のための教育）と方向性を広げた教育活動も進んできました。



環境教育の目標段階（ベオグラード憲章より）

森林環境教育とは？

森林をフィールドとしてさまざまな体験をして、人々の生活や環境と森林の関係について理解と関心を深めることを目的とした教育活動のことです。

生きている上で直面する様々な問題を解決するためには、理解に止まらず、問題に気づき、それに対して何らかの働きかけができる人を育てる、言い換えれば、行動する主体的な個人を育てることが目的です。

森林という環境は、そうした教育をする場としても適しています。多様性に溢れた環境で育った感性は、本質を見極めて問題を解決する、そんな人間としての土壌として重要です。

子ども達の感性を伸ばすための学習でもあるので、何かを教え込むような教育ではなく、自らが体験し、ふりかえり、気づきや学びが行動につながっていくような体験教育が大切なのです。指導者にも、教えるよりは「引き出す」「促進する」「わかちあう」「一緒に楽しむ」といった態度が求められます。

森林環境教育の目標は？



感じたことは学んでみよう。学んだことは実践してみようってこと。



森林のためにできること。それは、私たちのためにできること。

森林での学びは、学校のカリキュラムに合わせた目標値と共に環境教育的な目標、すなわち、持続可能な社会のために自らが考え、行動することができることを目指しています。環境の中で豊かな感性や想像力を育み、他者への思いやりや海の向こうでの出来事に思いを馳せて、自分の足許で起こっていることを認識し、それに対してどのように考え、行動するのか。

そのような一連のプロセスは、森林での授業を重ねることで考ええる土台が構築されていくのだと思います。森林という場に、子ども達をどれだけ預けることができ、どれだけ

づきを促せるのかは、私たち次第でもあるのです。

因みに本書では、右の図の一番目、森林の中で子ども達が体験し、感じる。そして先生が様々なことに気づかせるという部分に重点を置いた事例を多く紹介しています。

この本を足がかりにして、知的欲求を刺激したり、行動を促したりするの、私たち大人の役割です。

1. in the forest

森林の中で学ぶこと。そして感じる。気づくこと。

2. about the forest

森林について知ること。
森林と私たちの関係について学ぶこと。

3. to the forest

森林と私たち自身のことについて何ができるか考え、実行すること。

森林に連れて行く前に
知っておきたい

森林環境教育って、 そんなにすごいの？



森林は体験学習の場としてとても効果が高いと言えるでしょう。

**体験学習こそ、
最も効果の高い
学習方法です。**

最も高い効果が得られる学習法。そのようなものなら、先生の誰もが興味を持つのではないのでしょうか。

世の中には様々な学習方法がありますが、最も深い学びの方法は、自らの体験を通して発見することだとされています。

たとえば、私たち大人が、小学校の授業で教わったことをどれくらい覚えているでしょうか。残念ながらあまり覚えていないというのが、ほとんどの人なのではないのでしょうか。

逆に、学校外に出て森林で行った学習や、5年生の宿泊学習での川遊びなどは鮮明に記憶に残っていたりします。その違いはどこにあるので

森林に連れて行く前に
知っておきたい

しょう。確かに、慣れた環境の教室の中では全ての授業の印象が薄くなつてかえって屋外での活動が強いコントラストとなって残ります。でも、もっとも大きな要因は、自らの体を使って、実際に経験したことだからだということがあるのではないのでしょうか。

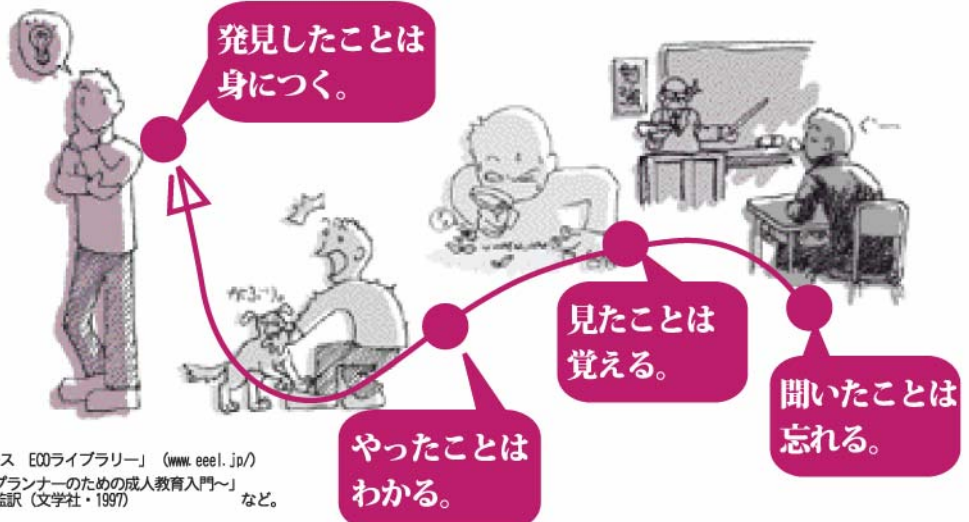
最も記憶に残る、あるいは発見のある学習は、自らが何かを体験し、何かに気づいたときに起こります。その際に匂いや、感触などの五感を伴っていることはとても重要で、そういった感覚と記憶と一緒に脳を刺激することで、深い学習効果を得られるのです。その体験の積み重ねは脳の中でネットワークとなり、もっと多くの気づきにつながるでしょう。



体験学習の段階

右の図の言葉は昔、中国で効果的な学習について老師が語ったとされる諺です（一説にはイギリスにも同じような言葉があるとされています）。アメリカでもこの諺を基に教育理論が作られました。

現在では環境学習・体験学習の指導者が知っておくべき効果的な学習として広く認知され、体験することが最も効果的な学習であることの説明に良く用いられる例えです。



※参考のできる資料として
ウェブサイト「環境教育・環境学習データベース ECOライブラリー」(www.eeel.jp/)
書籍「おとなを教える～講師・リーダー・プランナーのための成人教育入門～」
ジェニー・ロジャーズ著 藤岡英雄 監訳 (文学社・1997) など。

先生は森林の中に行ったらどうするの？

私たちのいくつかの心構えで森林での子ども達の学びはグッと深まるのです。



一緒に学ぼう



助っ人は積極的に。



非日常を楽しもう

森林での授業の先生の心構え

① 一緒に学ぼう

森林はあまりよくわからない。自然のことで教えられることは少ないと心配している方もいるかもしれません。

しかし、それは当然のことではないでしょうか。私たちの生活が森林や自然から遠く離れてしまった現代において、森林や自然のことを知らないこと自体、当たり前のことです。だから不安になるのも無理はありません。

せん。

そんな時、実は、森林の中では、子どもたちはとても頼りになる存在です。子どもたちは、自分たちの五感や体を使うということを、内在的欲求としてもっています。森林の中で彼らは本能とも呼べる好奇心とでいろいろなものを発見します。その発見に寄り添い、それを一緒に調べ、知識化していけばよいのです。

「これ、先生も調べたんだけど」と子どもたちに還元（フィードバック）することであな自身も森林博士？になれるのではないのでしょうか。

② 日常と違う空間・時間を楽しもう

当たり前ですが、森林は教室と違う環境です。

いつもと違う空間・違う時間の中では、子どもたちは違う表情や反応をみせるかもしれません。それが多様な刺激に溢れる森林の中であればなおさらです。いつもは目立たない子が生き生きとした表情を見せるシーンは何度も観てきました。

森林に身を置く心地よさを上手にプログラムや授業に活かしましょう。そんな中で新しい関係や発見が生まれるかもしれません。そのためには

先生も森林の中では、少し力を抜いてリラックスしてみたいかがでしょうか。

③ 誰かの手を借りよう

日本人は、国土の大部分が森林という環境の中で森林とつながりの深い文化や社会を培ってきました。だから森林や木に造詣が深い方や森林作業の技術のある方、林産物など森林の恵みをたくさん知っている方など、地域の身近なところには森の達人がいるかもしれません。

また、もしかしたら「森林」と「子ども」は地域のつながりを復活させるキーワードなのかもしれません。特に楽しいさんやおばあさんの中には森林環境教育の先生がたくさんいます。そんな人たちとの異世代交流も子ども達にはとてもよい機会だと思われまます。

また、子ども達のそれぞれの気づきに寄り添うにはたくさんの方が付いているほうがよいでしょう。これは安全管理にもつながります。専門家やボランティアの活用も積極的に考えていきましょう。

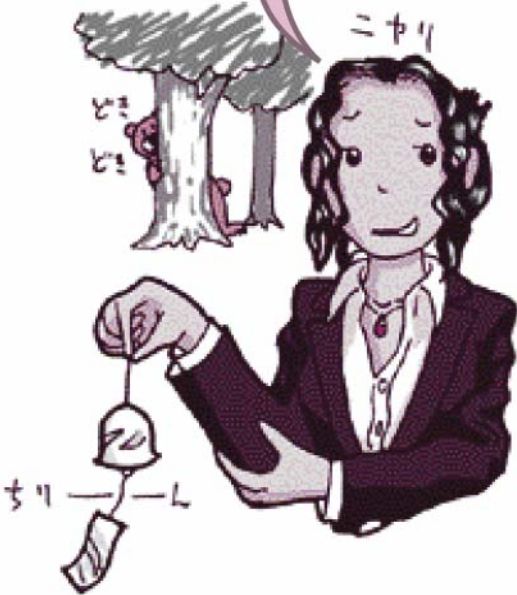
森林に連れて行く前に知っておきたい

森林って、
危ない気がします？



覚えておくべき危険は
いくつかあります。

まずは
ひ・ぐ・ま



北海道の森林に
入るといふことは…？

札幌の周りにもたくさんヒグマが暮らしているのです。知っていましたか？

森林で活動をするとき、私たちはいつもヒグマの危険や出没について気にします。でも、ヒグマは北海道に昔から住んでいる動物です。北海道の森林には、いるのが当たり前なのです。そして広大で豊かな森林を必要とするヒグマがいるということは、北海道の自然がいかに豊かであるかという証拠でもあるのです。特に2百万人近い人が暮らす大都市札幌では住宅地に隣接する山にヒグマが現れたり、時折人間が歩く道路を利用することもあります。札幌

森林に連れて行く前に
知っておきたい

に暮らすヒグマは、札幌が今なお豊かな自然とともにあることを象徴し、さらには人と自然のつながり、関わりについても改めて思い出させてくれます。このような街は世界広しと言えども札幌だけでしょう。ヒグマは私達が最も気を遣う脅威でもありますが、同時に豊かな自然の存在を教えてくれるよい教材でもあります。ヒグマにはもともと人間を恐れ避ける性質がありますが、人間側の不適切な対応が不幸な被害を招きます。交通事故と同じで適切に対処することで事前に危険を避けることが大切です。豊かな自然とともに私たちがあることを忘れないために、ヒグマのことをしっかりと認識し、理解することは、とても大切なことです。

ワンポイント 授業のための+α

野生動物について聞いてみた。

北海道の人と野生動物の問題を解決するために研究を続けている間野さんは、北海道でしかやれないことをやりたくてヒグマの研究に身を投じ、現在でも真実の記録を集積する仕組みづくりを目指して研究を続けている。そうして積み重なった事実が野生動物と人との折り合いを付ける材料になったら良いと語る。

学校の先生には、無理に教えようと思わず、肩の力を抜いて現実を子ども達に見せてあげてほしいと言う。五感を使って感じ、体験し、考えて学ぶことが大事で、そうして考えたことに議論を積み重ねて、野生動物と人とのつきあい方を見出してほしい。でもそのための読み書きや理論的な考え方、コミュニケーション能力を育てる学校の教育もとても大切だと語った。

ヒグマを通して人と自然環境を考え、よい折り合いをつける知恵を見つけてほしい。そんな気持ちで伝わるお話だった。



間野 勉さん
まの つとむ

北海道環境科学研究センター
自然環境部 主任研究員 兼
野生動物科長

みんなてヒグマを
勉強しよう

いつも元気に
大きな声で。

足跡みつけたら
すぐに帰ろう

会ったら
ゆっくり後ずさり

やっちゃん
走って逃げる&
死んだフリ

森林に行く前に、まずはヒグマがどんな動物なのかを学ぼう。

森林には一人で行くよりみんなで行こう。森林ではにぎやかに。熊鈴を鳴らすのも有効。ヒグマは本当は人間に会いたくない。

新しい足跡は危険信号。すぐに引き返そう。

もし出会っても決して慌てず騒がず話しかけるつもりで落ち着いて。大抵ヒグマが先に逃げてゆく。走って逃げるを追って行く。死んだフリをするといじられる。ヒグマは木登りも得意だよ。

悪い例。

- スカートやハイヒールは動きを制限し、危険。
- 着衣は基本的に吸水性・速乾性にすぐれた丈夫なものを。
- カバンはリュックか、なければ肩掛けで持

●ハチは香水やオーデコロンの匂い興味を持つ。野外では控えよう。

当惑する

帽子をかぶろう

強い日差しを防ぐだけでなく、ハチの攻撃からも身を守る。

白っぽい服
長袖長ズボン

ハチは黒っぽいものに対して攻撃的になる。長袖長ズボンは野外の基本。

それから スズメバチ

危険度 No. 1 !!

山での事故はともも多いのです。危険度は、実はヒゲマ以上です。好奇心が旺盛な小学生は特に注意が必要かもしれません。

人間の免疫機能との関係で、刺されることも危険。特に、暑さが一段落して森林での遊びがしやすくなる夏後半から初秋には、ハチの活動も活発になる時期なので注意が必要です。

ハチが来ても
手で払わない

ハチは激しい動きに反応して攻撃する。木になったつもりで微動だにしないこと。

センセ、
そのカッコンで？

何匹かハチが
いたら近づかない

近くに巣があるかも。巣に近づきすぎると歯を鳴らして威嚇してくるぞ。

刺されたら
安静にひて
病院へ直行！

襲われたら
うずくまって
動かない

目や頭を刺されないように！

あとは ウルシとか。

かぶれ率 No. 1 !!

ウルシは人によってかぶれたり何ともなかったり、また、触れてから2日も経つてからかぶれたりもしますので、ウルシかぶれ症と認識できない場合もあるようです。

ツル性のツタウルシは山のどこにでも生えているので注意しましょう。樹木性のヤマウルシのほか、ヌルデなどもかぶれる木として知られています。まずはどんな植物なのか、調べてから森林に行ってみましょう。

さわるべからず。

ツタウルシ

- ツル植物だけど地面にもある。
- 三つ葉。細かいギザギザがなく、つるんとした葉っぱ。
- 秋には紅葉がきれい。

ついでに そのほか。

下見はできる限り
行いましょう。

森林は多様な環境だけに、危険も伴います。特に、夢中で遊んでいて川にはまったり、崖から落ちたり道に迷ったりという事態は避けなければなりません。

そのために、一度は活動場所の下見を行っておきましょう。周辺の危険な場所や器物はチェックし、活動の前に近づかないよう、触れないようルール付けします。

また、活動のネタを探したり、仕込みをするためにも現地の下見・下準備をすることは重要です。

なるべく多くの大人を
連れて行きましょう。

子どもの発見や疑問に応えてあげる、あるいは、共感してあげる大人は多ければ多いほど良いでしょう。子ども達の感情に寄り添える大人達はなるべく多く声を掛けて、一緒に森林で活動しましょう。

共感したり、一緒に分らないことを調べたりするだけでなく、大人の目が増えればそれだけ子ども達の危険の回避につながります。

お母さんやボランティアをしたい大学生、物知りのおじいちゃんなど、探すと意外にお手伝いをしてくれる大人はたくさんいるものです。

森林に連れて行く前に
知っておきたい

森林ではいけないことってありますか？

森林と、森林に生きる生き物たちに優しい活動を心がけましょう。



国有林は国の、そして私たちの財産なのです。

日本の国土の7割近くを占める森林の美しさは、山紫水明と謳われた日本の美しさの代名詞でもあります。特に国有林が多い北海道では、身近に自然度の高い森林を見ることができ、このことは他の地域では得難い宝物だということもできるのではないのでしょうか。そんな森林を持続的に、大切に使用していくために、私たちができることは何でしょうか。

● **ゴミは持って帰ろう**

基本ですが、ゴミは持ち帰りましょう。残して良いのは足跡だけです。

● **立ち入り禁止は守ろう**

国有林の立ち入り禁止区域はそれなりの理由があつて設定されます。特に崖崩れの危険があつたり、作業中だと大変危険ですので、立ち入り禁止区域に入らないようにしましょう。

● **採集は最小限に**

授業で木の葉や木の実、昆虫などを採集することがあるかもしれませんが、でもそれらは森林に生きる立派な命。自らの勉強のために、持ち帰るのはほんの少しに止めましょう。

● **山火事注意!!**

ちよつとした火の不始末が原因で多くの生き物と大切な環境が灰になつてしまいます。くれぐれも注意を。



森林に連れて行く前に
知っておきたい

木と樹 森林と木材

宮本英樹

NPO法人ねおす 専務理事

column

森林で遊び、学んで学校や家に帰ってきたとき、あらためて周りを見回してほしい。教科書やノート、鉛筆、机、椅子、床に壁。あらゆるものが木から作られている。私たちは木の中で暮らしている。

そういった木材製品からその木が生きていた森を想像できるだろうか。

一方で筆入れ、消しゴム、プラスチック皿、靴、服、電気。あらゆる場面で石油に頼つた生活をしている。私たちは石油つけの暮らしをしている。

自分たちがいつも化石燃料を消費していることに気づいているだろうか。

現代はつながりが分かりづらいライフスタイルである。そのなかで、自分の生活が何に支えられているのか。何とつながっているのか。そのことをもう一度考える教材として木は最高の素材である。

北海道は総面積の約7割

を森林が占めており、最も身近で循環型の資源であるはずの木材や森林環境が上手に利用されておらず、この豊かな資源を生かす知恵や技術、文化も十分に育まれ、定着はしていない。

地球温暖化をはじめとする環境問題が子ども達の未来において最重要課題とされる中で生活が何にどのようにつながっているのかを一緒に考えていくのも、大人の役目ではないだろうか。

木材と森林で私たちが見かける木が繋がっているのと同じように、国内の森林環境問題は世界の森林環境問題ともつながっている。そして経済とも結びつき、複雑に絡み合っている問題である。つまり、森林は国際理解教育としてもとてもよい教材と思われる。

森林から身の周りの生活、生活から世界へと視野を広げるそんな森林環境教育であつてほしい。